

箕作秋坪は、明治元年（1868）に、浜町（現在の東京都中央区日本橋蛸殻町）にあった津山藩江戸屋敷の一角を借りて、私塾「三叉学舎」を開きました。塾名の由来は、藩邸の辺りで、隅田川が三つに分かれていて、三叉と呼ばれていたことにちなみます。

三叉学舎では、主に漢学や数学、そして英語が教えられました。幕末にはオランダに代わって、アメリカやイギリスなどの国が台頭し、英語の習得が急務になっていました。それにいち早く気付いた秋坪は英語を課目に加えたのでした。この頃、東京には、英学塾が数カ所開かれています。その一つが福沢諭吉が開いた慶応義塾で、当時、三叉学舎と慶応義塾は「洋学塾の双璧」と称されていました。津山出身で早稲田大学の学長などを勤めた平沼淑郎は、9歳で上京して、三叉学舎に入塾しました。淑郎の自叙伝「鶴峯漫談」には三叉学舎での学習方法が詳しく記されています。それによると、最初は2歳年上の秋坪の四男・元八から英単語を、その後、別の上級生に付いて文法を学びました。勉強が進むと、何人かの仲間と、順番に英文の読解をして、塾生同士がそれに質問するという輪講を行います、上級生がその正誤を判断して点数を付けていました。塾生同士が行う質問もとても難しかったようで「十分な予習をしていなければならず、戦場に出るような真剣さで教室に出なければならなかった」と思い出を綴っています。

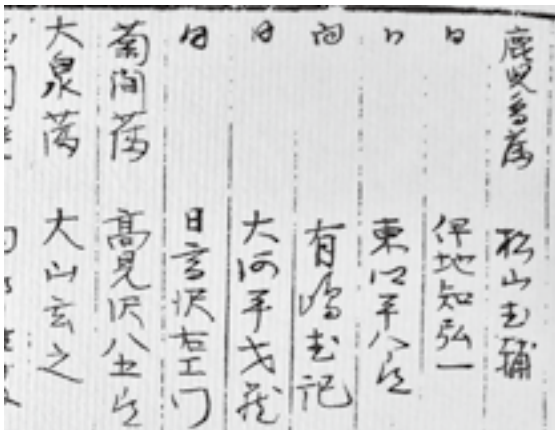
明治5年（1872）には学制が公布され、次第に教育制度が整

# 洋学博覧漫筆

～ 秋坪が開いた三叉学舎 ～

備されていきます。それに伴い、英学塾も徐々に姿を消していきました。三叉学舎がいつまで存続したかは明らかではありませんが、明治12、13年（1879、1880）に在籍していたという塾生の回顧録があるので、その頃までは続いていたようです。

三叉学舎は、多い時には百人を超える塾生がいました。その中には後に首相となる原敬や、日本初の近代的国語辞典『言海』を刊行する国語学者・大槻文彦、海軍司令官となる東郷平八郎、津山出身で食料品などの輸入を行った明治屋の創業者・磯野計ら、そうとうたるメンバーがいます。三叉学舎は、明治後期から大正・昭和初期にかけて、日本の政治や経済、教育の分野を支える人材を輩出するという、大きな役割を果たしたのです。



▲三叉学舎塾生姓名（出典「興斎交友録」〈武田科学振興財団杏雨書屋所蔵〉）  
右から3番目に東郷平八郎の名前があります

## もくじ Contents

- 3 特集  
津山市民憲章40周年
- 6 市政だより
  - 年末年始公共サービス
  - 第2回津山市版事業仕分け
  - ふるさと津山サポート寄付金 ほか
- 16 ふおとほっとるぼ
  - 津山まつり ほか
- 18 みんなのページ・ちゃい
  - お・た・よ・り
  - きらめく津山人
  - イラスト・絵手紙
  - 広報クイズ ほか
- 21 としょかん
- 22 こどもひろば
  - 久米キッズ料理教室
  - じどうかん
- 23 けんこう・そうだん
- 24 けいじばん
- 30 くらし
- 32 Albumあの頃の津山